



【教育支援チーム「まつ」(陸前高田)】

教育支援チーム「まつ」が立ち上がったことで、陸前高田の学校支援も新たな展開を見せています。まずは、「まつ」の事務局長の動きにより、現地のネットワークを生かした学校への物資提供が行われるようになっていきます。震災後半年を過ぎた頃から、長期の被災地支援を検討しているボランティア団体の情報交換の場が「連絡会/連絡協議会/ネットワーク会議」といった名目で行われるようになっております。もちろん、Ed.ベンチャーのように定期的な訪問による支援活動では、そのような場に参加しても、提供できる情報もあまりなく、これまでの支援を継続することが精一杯だったということもあり、そのような場への参加は控えてきました。しかし、「まつ」の事務局長が、子どもや教育に関する「子ども支援ネットワーク会議」に参加するようになり、学校から要望のある支援物資で、他の団体から提供可能な物資に関してはそちらを優先し、提供のめどが立たない物資に関して Ed.ベンチャーから提供するという流れを作られつつあります。これまで不足している紙類を定期的に入れていましたが、こちらは他団体に移行しましたし、新たに支援を始めた米崎小中学校から依頼のあった部活用品も他団体の支援で実現しました。

もう一つは、「まつ」の企画で、1月10・11日の冬休み期間を利用した小友中学校の学習支援が行われました。学習支援のボランティアとしては、モビリアで子ども支援を行ってきたすたんどばいみーのスタッフ3人と、石巻で子ども支援を行ってきた東京理科大学の学生3人です。当初の企画は3年生の受験に向けた学習支援でしたが、小友中学校の先生と「まつ」の事務局長が企画を詰める中で、全校対象の学習会へと形を変えました。小友中学校は全校36名の小規模校ですが、両日ともに午前中はほとんど全員が参加する学習会となりました。最初は初対面に近い子どもも多くいましたので、距離のある雰囲気でしたが、そのうちに打ち解け、わからないことや知りたいことを積極的に質問して、一生懸命勉強に取り組む姿が印象的な学習会でした。特に、スタッフ全員が驚いていたことは、文字を書くことを嫌がる子どもたちの少なく、どの子どももみんな文字を書き慣れている感じがすることでした。いわゆる「田舎」と呼ばれる場所に暮らす子どもたちの学習への向かい方に、「都会」での学習とは異なる何かを感じたことでしょうか。また、年の近いお兄さん・お姉さんと勉強するという出会いに、小友中学校の子どもたちは何を感じたのでしょうか。いずれにしても、同時代を生きる者として豊かな未来を生み出す出会いとなってほしいと願わずにはいられません。

こうして教育支援チーム「まつ」は着々と基盤作りを行っており、現在は、パンフレットや入会申込書の作成段階に入っています。1月下旬に予定されている「第1回学校支援連絡会」をスタートとして、広く会員募集をする予定になっています。



【万石浦ライオン学校の手紙】

今回の支援の2日目は、万石浦ライオン学校の支援の中心になっている2人の支援者(ライオン学校の通称:校長・大先生)がともにいませんでした。そのため支援隊では「校長代理」という称号の若手の先生をたてて支援が行われました。こうした事態に直面して、子どもたちからは、「俺、副校長」「俺も…」などという声があがり、「第1副校長」「第2副校長」が決まりました。そこへ、「僕は理事長で…」という風に飛び込んで来る子どもも出てきて、そうやって名乗りをあげた子どもたちが、みんなを集める場面やモデルになる場面で大活躍でした。このようにライオン学校は、残されたみんなで力をあわせて過ごした一日になりました。

さて、5月中旬に支援を始めた時には、とりあえず夏休みまでということでしたが、修学旅行での子どもの大きな成長を受けて、もう半年、子どもたちにつきあってみようということで、夏以後は月1回の支援を継続してきました。この間、子どもたちは本当に大きく成長したと感じます。自分の要求が通らないと「ふて腐れる」といった行動が見られなくなり、集団遊びを長く楽しめるようになりました。うまくいかない時は、少し集団から離れて気持ちを落ち着かせて、また参入してくるということもできるようになりました。指しゃぶりが続いていた子どものそれがピタリとなくなりました。決して上手とは言えませんが、悪いことは悪いと認めて謝れるようにもなりました。自分より力の弱い子をいじめるような言動も減り、弱い子もそれなりに居場所を見つけて一緒に遊べるようになりました。子どもたちの成長は、決して一直線ではありませんが、行きつ戻りつしつつも確実に成長し、少しずつ、自分の判断、自分の価値観に基づいた行動ができるような、自立した面を見せるようになっていきます。こうした子どもたちの変化を受けて、万石浦ライオン学校は「閉校」に向けて、新たな「つながり」づくりへの動きとして「手紙」を始めました。

初日は、12月末で大阪から来て公演をしてくださった市川富美雄一座のみなさんにお礼の手紙を書きました。座長の奥様から頂いた手作りのお手玉と作品を一人ひとりが改めて配ってもらい、用意してきたちょっと大人っぽい便せんに、公演に来て下さったこととプレゼントを頂いたことのお礼を書きました。スタッフが横について書き始めたのですが、びっくりしたのは、多くの子どもが、「見ないで!」と言って自分の力で書き始めたことです。しかも、「書けたよ」といって見せてくれた手紙は要点もしっかりまとまっていて、心のこもるものでした。「校長」がその一人の文章を取り上げてみんなの前で紹介してあげると、次からはみんな校長のところへ持ってきます。そのため、たくさんの子どもの文章を読むことになったのですが、子どもたちは、お互いの文章を参考にしたり、刺激を受けたりして取り組みました。



子どもたちがスタッフといっしょに準備した、飾り付けをしたクリアファイルに手紙を入れて、スタッフが2月に一座に直接届ける予定です。

そして、その2日目に行われたのが「往復はがき」への挑戦です。この日、一人一枚ずつ往復はがきが、校長代理の支援者から配られました。2枚のはがきがくっついてある往復はがきを受け取り、子どもたちも何やらいつも違う様子に、いつもよりしっとりした雰囲気になっています。往復はがきの説明が行われた後、ペアになっている支援者のところに行き、「往信」に、まず支援者の住所を教わって書きました。次に「返信」に、自分の住所です。仮設住宅に移った子どもは、自分の住所をまだ完全には覚えていないようで、親に電話をしたり、サポートセンターのスタッフに聞いたりしながら書きました。そして、最後にペアへの手紙です。「書くの手伝おうか？、それとも、一人で書く？」という質問に、3年生以上の子どもたちの多くが、「一人で書く」と申し出て、はがきに向かって何やら書き込んでいました。支援者は、それを遠巻きに眺めています。一人になって机に向かって真剣に文字を書くという子どもたちの活動を見守りながら、子どもたちがまたひとまわり大きくなって、私たちからの自立を感じる場面になりました。また、「人は伝えたいことをもって始めて書くことができる」ということにも、あらためて深く思い入りました。そうした時に浮かび上がるのは、通信15号でお伝えした「被災した経験を書いて、お小遣いを稼ごう」という商業ベースに乗せて「書くことを迫る」ことの横暴さです。そして、そこで書かれることと、今ここで書かれていることは、きっと、子どもたちの経験において、その重み・質において、大きな違いがあると思うのです。

こうして書かれた往復はがきは、午後、みんなでポストに投函しに行きました。一人ひとりポストに投函です。子どもたちは「ちゃんと届け！」そんな思いだったことでしょう。間もなく、その手紙は支援者のもとに届き、支援者それぞれから返事を出すことになっています。2月の支援の時には、そのはがきを持って集合です。

この「往復はがき」の練習は、3月の最後の支援の際に、子どもたちに往復はがきを渡すことにつながっています。困った時、相談に乗ってほしい時、来てほしい時、そんなSOSの発信の時に、往復はがきを使って手紙を書いてねという「つながる」方法として盛り込まれた活動です。石巻万石浦子ども支援は、このような形での決着になる予定です。

【中学生スタッフの可能性・・・もうひとつの出会い】

2回連続で引地台中学3年の藤原君が支援のメンバーとして参加しました。今までも参加したいという意志が強かったのですが、支援の日程があまりにも強行軍なので体力的な不安があったこと。ライオン学校の子供たちを上手に受け入れ、スタッフとしての振るまいができるかどうか不安であったこと・・・などからずっと見送ってきました。しかし、冬休みを軸にした支援であることからの参加でしたが、大人が思っていた不安どころか、考えてもいなかった「可能性」を見せてくれました。それは、「同世代のつながり」ということです。1月10日の冬休み明けの朝会で、藤原君は自分の学校



の全校生徒に呼びかけました。

「被災した子どもたちに聞いたら、『がんばれ東北、なんていってほしくない。』と言っていた。ではなんとはいいいのか聞いたら、『いっしょに復興しよう』と答えてくれた。僕たちは政治家じゃないから、小さなことをいっしょに積み重ねていこう。」

長い時間のかかる被災地の復興。その主人公は今の子どもたちです。子どもたち同士の出会いとつながりが、多くの可能性を秘めていることを藤原君が教えてくれました。

1月21日（土）18時～ 第4回支援報告会開催 富士見文化会館（大和駅（小田急線／相鉄線）徒歩5分）

12月でEd.ベンチャーの事業年度が終了したことを受けて、第4回の支援報告会を開催し、3.11以降の支援を総括したいと思います。また、陸前高田市に立ち上がりました教育支援チーム「まつ」の事務局長（臼井美穂さん）にもお越しいただき、被災地から見た「支援」についてお話いただく予定です。

【支援隊活動記録 12月29日～1月13日】

■陸前高田学校支援

○1月9日～11日（第30回）教育支援チーム「まつ」事務局長との打ち合わせ、子ども支援ネットワーク会議参加、業者支払（山十、熊谷教材）、小友中学校学習支援
□支援隊メンバー：清水睦美（東京理科大学）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、チューブサラーン・西岡歩・宮脇英理（すたんどばいみー）、今井美里・甘利悠貴・古浦新司（東京理科大学学生）

□教育支援チーム「まつ」を通しての物資提供：気仙小学校（リッグラフインク、リコトドラムユニット他、49,600円）、小友中学校（教育ソフト、ハムパンほか、57,873円）、気仙中学校（リッグラフインクほか、37,000円）、広田中学校（コピー用紙、13,920円）、広田小学校（ケト紙、1,512円）

■石巻市万石浦子ども支援

○1月7日～8日（第19回）万石浦ライオン学校の1月支援
□支援隊メンバー：柿本隆夫（引地台中学校）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、福島正彦・小沼慶太（引地台中学校）、内藤順子・吉間里依（大野原小学校）、今井美里・大林沙紀・甘利悠貴・古浦新司（東京理科大学学生）、藤原弘輝（引地台中学校生徒）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）12/27～1/12）
堀健志（上越教育大学）、権田和子（元中学校教諭）、清水雄策・美枝<子ども支援用餅>

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

